

「誰そ彼」時から「彼は誰」時へ 『33年後のなんとなく、クリスタル』を執筆して

平成27.4.16 如水会館 松風の間



作家
お 夫 (56法)
な か や す ひ ろ
た 田 中 康

一、超少子・超高齢社会が進む中で「なんとなく、クリスタル」の膨大な注の最後に、当時の厚生省が発表した合計特殊出生率と高齢化率の将来予測数値を記した。二〇代半ばの私は、量の拡大から質の充実へ認識を改めねば日本は立ち行かなくなると感じた。だが、その衝撃的だった予測すら、随分と楽観的な数値だった。昨年末に上梓の『33年後のなんとなく、クリスタル』に載せたデータでは、国連が定義する六五歳以上人口が七%の「高齢化社会」になったのは大阪万博の一九七〇年。「超高齢社会」の二二%を超えて、現在は二五%だ。一方、合計特殊出生率は一・四三で、このまま推移すると百年後には四二

〇〇万人台となる。ところが昨年六月に「トレンドを変えていくことで五〇年後にも一億人程度の人口が保てる」と非現実的な閣議決定が行われた。その根拠は、毎年二〇万人の移民を受け入れるとする内閣府が経済財政諮問会議に提出した資料だ。声高に「国柄」を語る風潮の中で、それと真逆な「大本営発表」が机上の空論として一人歩きし、それがメディアでも報じられず、国民的議論にもならない。

考えてみれば、日露戦争前後の人口は四七〇〇万人。スローフードを始めとして、身の丈に合った日々の生活を楽しんでいるように見えるフランスやイタリアは、現在の日本の半分程度の人口。「移民の是非」云々以前の問題として、経済成長の大前提は人口維持という硬直した発想こそ、破綻した社会主義の計画経済と同じ、想像力の欠如ではないか。

二、公益資本主義としての富国裕民

米国型の株主資本主義でも中国型の国家資本主義でもない、目指すべき富国裕民の道はどこにあるのか。利益を求める欲望経済を利用しながらも、社会にとつて有用な企業を全世界に生み出し、コミュニティの再生をもたらし経済システムを立ち上げようというムーブメントが公益資本主義だ。

私は（長野県）知事時代、以前から「社会的共通資本」を提唱されていた宇沢弘文さんに「未来への提言」コモンズから始めることが、「イデオロギー」という不毛な対立を超えた私たちの目指すべき社会だ。エドモンド・バークはフランス革命を批判したから真の保守だと勘違いする人が多いが、実は彼は、人々の革命への要求を先取りするような、その結果、人々が革命など必要としなくなるような賢明な政治や経済の指導者こそ真のリーダーだ、と述べている。とするなら私たちは「切磋琢磨の正しいハイエク」「経世済民の新しいケインズ」の融合を編み出す必要があるのではないか。

四、帰納法的発想への転換と量の拡大から質の充実へ

「決断」とは、中国最古の夏王朝の始祖・禹王が黄河の堤防を取って「断つことを決し」て大被害を抑えた史実が語源だ。洪水時に河道内で制御しきれぬ場合には堤防を切断し、人的被害が少ない田畑に水を逃す選択を取った。的確な認識、迅速な決断と行動、明確な責任の重要性を物語る。「3・11」以降の日本は「フクイチ」原発問題に留まらず「法治国家」から「放置国家」そして「呆痴国家」となりかけている。私は「造る」から「治す」「護る」「創る」への帰納法的発想と、脱偏差値教育の自分で考え・語り・動く「智性」「勤性」「温性」が必要と述べてきた。

フランスには三万六〇〇〇ものコミューンがあるが、日本の基礎自治体の数は「平成の大合併」で一七〇〇余と半減した。

まる、信州ルネッサンス革命」を書いていただいた。自然環境、インフラという社会基盤、教育・医療・金融といった制度資本は、特定の人の独占物でなく、誰もが共有し得る社会的共通資本。教皇フランシスコが一昨年発表した使徒的勸告『福音の喜び』エヴァンジェリイ・ガウディウム』は日本ではほとんど報じられずじまいだが、極めて示唆に富む。私たちは高度消費社会からも金融資本主義からも逃れられない歯車の一つであったとしても、不条理だらけの社会の中でいかに人間としての相貌と体温を持つべきかを述べている。

三、形式知を超えて暗黙知との融合へ

ひとり暮らしのおばあちゃんに「この魚の切り身は小ぶりだから三〇円まけとくよ」と言うのが市場（いちば）。市場（しじょう）はコンピューターに映し出された数字が全てと考えがちだ。家族・集落・地域という人間関係や文化・伝統といった「市場では数値に換算出来ない物」価値ゼロ」と捉える金融資本主義は、事業展開する国家で税金を支払わぬ多国籍改め無国籍なモンスター企業が、国民国家「ネイション・ステート」よりも上位に立って、消費者「国民」を差別する惨状を生み出した。従来知識や経験に基づく演繹法だけでは袋小路に入ってしまった。あるべき社会に向かってブレークスルーを行う帰納法こそが人間の叡智なのではないか。即ち、形式知を暗黙知と融合さ

合併特例債で豪壮な庁舎やホールは林立したものの、地域の疲弊は更に深刻だ。なのに、その反省もないまま「コンパクトシティ」と称する新手法のハコモノ行政を唱える動きが目立つ。効率主義で集落を統廃合すれば、逆に川も山も荒れ、災害を誘発する。アメリカとして住民の手で設置され、州憲法に定める手続きを経て承認された自治体が八万四〇〇〇以上も存在するのは何故か、考えるべきだ。なのに、民間団体「日本創成会議」とやらの提言を受けて政府は、全国四一地域に介護施設を新設して首都圏の高齢者を移住させよ、と、姥捨て山の如き時代錯誤な「文化大革命」の下放運動を予算化しようとしている。

道州制の議論でも長野県は何れの試案でも北関東州。だが伊那谷や木曾谷は経済圏も交通圏も文化圏も東海州だ。更に地勢圏、歴史圏も踏まえて、都道府県自体をガラガラポンせねば、廃藩置県以来の改革だと大見得を切っても屋上屋を重ねて、更に行政組織が肥大化するだけだ。

五、新しい公共事業への具体的提言

横浜市は三七〇億円も投じて認可保育所への株式会社参入を促し、待機児童ゼロ宣言したものの、逆に多くの潜在待機児童が出現する結果となった。世代を分断しない老保一元化の発想で、空き店舗や空き家を改修してデイサービスを開設。保育士も配置し、お年寄りとお孫さん世代が一つ屋根の下で過ごせる

である。私は「官」対「民」という言葉で流行語大賞の表彰式に來いと言われたことがあるが、一度たりともそんなことは言っていない。冷温停止でフリーズしていた方を人間の体温に戻す——「官」の人間を一人の「民」の心に戻してあげることこそ真の行政改革ではないだろうか。

七、消費者側の希望に根ざしたコンシューマー・イン

品川一名古屋を四〇分で結ぶリニア中央新幹線の両駅は高深度でJR東海の資料では地上まで一五分。その結果、大手町の経団連ビルから東京駅経由で名古屋駅に向かうと七六分。実は「のぞみ」と二〇分しか変わらないのに消費電力は四・五倍。地上区間は一四％で、フォッサマグナが走る南アルプス地下一六〇メートルを無人運転。故障や事故の際の回避誘導はどうするのか。東海道新幹線からの乗り換え率を六二％と見込むが、人口減少社会で両者の採算が取れるのか疑問である。

情報が与えられるのみのインフォームド・コンセントは他律的同意。自律的決断のインフォームド・チョイスで初めて双方向になる。それはプロダクト・アウト⇨供給側の都合から、コンシューマー・イン⇨消費者側の希望に根ざした社会への転換でもある。

「宅幼老所」を単独予算で三五〇カ所、知事時代に実現した。鋼鉄製と同じ強度で地域雇用の五倍となる木製ガードレール設置、針葉樹の間伐、針広混交林の造林等、新しい地域密着型公共事業を、徹底した入札改革を踏まえて実践した。

「脱ダム」宣言」は公共事業撲滅論では決してない。公共事業のあり方を変えることだ。建設せねば大洪水になると喧伝された八ツ場ダムは計画発表から本体工事着工の今年まで六三年も要している。その間、着実に地元雇用創出につながる鋼矢板を用いた護岸の補強も、河床掘削と呼ばれる浚渫も、上流域の森林整備も行われまま。治水が目的でなく、ダムという巨額予算の事業確保の手段となっている。汚水処理も、全国の未整備地区に下水道を敷設するには最低でも四七兆円必要だが、集落ごとに設置する合併処理浄化槽で水洗化すれば六兆円で済む。これこそが目に見える形の、人にも賛同される税の使い方だ。

六、官から公へ、民から公へ

「私」という字の「ノ木偏」は穀類、右側の「ム」は肘鉄を食らわす意味。自分達の穀物を盗みに来た他集落の人間は追い返すという原義。他方、「人」と「ム」で構成される「公」とは肘鉄を人間の体温で温め、まさに公の一人の人間に戻してあげるという意味。日本では「公」イコール「官」と思われているが、「公園」という言葉のように、本来は分け隔てない時空

八、「誰そ彼」時から「彼は誰」時へ

「たそがれ」は「誰そ彼」と昔は表記された。目の前の、誰だか判然としない相手は一体誰だろうと五感を働かせる時間帯という意味合い。他方で夜明けは「彼は誰」。だが、江戸時代の頃までは朝方と夕方の両方を「彼は誰」と呼んでいたと高校の古文の授業で習った。空は同じように薄明るく、突然目をあけたらどちらなのか判らない。私たちは超少子・超高齢社会ニッポンを「誰そ彼」時だと思い込んでいたが、実は「彼は誰」時、すなわち夜明けなのかもしれない。

同じく少子高齢な欧州だけでなく、出生率の低下が進行しているASEAN諸国も早晩、同じ道を歩む。とするなら、量の拡大や維持から質の充実の富国裕民国家の道筋を、モノ作り産業と同じくオンリーワン・ファーストワンの心意気で具体的に示してこそ、ニッポンが再評価される。

『33年後のなんとなく、クリスタル』の最後で主人公は、「微力だけど無力じゃない」「ささやかだけど、確かなこと」「出来る時に出来る事を出来る時に出来る場で一人ひとりが出来る限り」と述べている。空威張りとは無縁の、しなやかな矜持と諦観を併せ持ったニッポンの日の出を再び目指す上で大切な意識ではないかと思っている。